

What's new? —研究室探訪—

信州大学医学部保健学科作業療法学専攻・大学院医学系研究科保健学専攻

小林 正義

作業療法 (Occupational Therapy; OT) は理学療法 (Physical Therapy; PT) とともにハビリテーションの専門職として1960年代に誕生し、現在では介護保険や障害福祉など多くの領域で実践が求められています。本稿では精神科リハビリテーションに関連する最近の研究を紹介します。

1. 統合失調症の認知機能障害に対する個別作業療法の効果：多施設共同ランダム化比較試験

認知機能障害は統合失調症の中核的な障害として社会的予後に影響を及ぼします。我々は統合失調症の認知機能障害に対する OT の効果を検討しました。新規入院の患者163名を、個別 OT を行う介入群 (66名) と通常の OT を行う対照群 (63名) にランダムに割付け、3カ月後の効果を比較しました。ベースライン評価では両群に差はありませんでしたが、3カ月後には介入群の認知機能評価尺度 (BACS)、内発的動機づけ尺度 (IMI)、臨床満足度尺度 (CSQ-8) の得点が有意に高く、個別 OT が統合失調症の認知機能障害の改善と内発的動機づけに効果的であり、治療満足度を高めることが検証されました (Plos One, 2018)。

2. 気分障害患者に対するリワークプログラムの有効性の検討

うつ病による休職者が増加しています。信州大学医学部附属病院では鷺塚教授の指導のもと、OT と精神科が連携し、気分障害による休職者を対象にした復職支援 (リワークプログラム) を始めました。今回、リワークプログラムの有効性を検討する目的で、気分障害患者13名を対象にプログラム (3カ月間) の前後およびプログラム終了後の6カ月間に、復職を果たした復職群7名と、復職に至らなかった継続群6名の BACS、社会適応度評価尺度 (SASS-J)、ハミルトンうつ病評価尺度 (HAM-D)、復職準備性評価シート (PRRS) の得点を比較しました。プログラム前後の比較では、BACS と PRRS で有意な得点の増加を認め、プログラムの有効性が示唆されました。また、終了時には復職群は継続群より SASS-J の対人関係と PRRS の準備状況が有意に高く、気分障害患者の復職には対人関係技能と復職準備性の充実が重要であると思われました。今後も例数を重ねて詳細な検討をしていく予定です (作業療法, 2018)。

3. 危険認知を評価する模擬運転テストの開発：高齢者の応答特性

運転映像をモニターに提示し、ハンドル、アクセル、ブレーキの操作反応と、危険認知による生体反応を皮膚電位反射 (SPR) と手掌部発汗反応 (PSR) によって評価する模擬運転テストを開発し、高齢者の応答特性を評価しました (図1)。高齢ドライバー52名 (70.2±6.1歳) を対象に模擬運転テストと Mini Mental State Examination (MMSE)、Trail Making Test (TMT) を実施しました。MMSE の得点が標準範囲にある被験者は TMT の成績も概ね標準範囲にあり、危険予測や咄嗟の危険回避場面では SPR の陰性波と PSR が増加し、同時にブレーキの踏み込みがみられました。一方、認知機能の低下を認めた被験者では TMT の成績も低く、危険場面と一致しない SPR と PSR、およびデバイスの誤操作が認められ、本模擬運転テストによって高齢ドライバーの危険認知能力を評価できる可能性が示唆されました (Transportation Research Part F, 2017)。



図1 模擬運転テスト